

# 「第3回全国福祉用具専門相談員研究大会」開催

ニッショーホール（オンライン併用）／6月16日（木）

6月16日（木）に東京都港区のニッショーホールで「第3回全国福祉用具専門相談員研究大会」が開催される。口述発表では、全36組が現場で培った福祉用具専門相談員の実践や知見を披露する。口述発表のテーマは①PDCAサイクルの推進②福祉用具安全利用に向けた取り組み③福祉用具メーカーとの連携・協働④地域、多職種連携、事業所の取り組み⑤経験3年未満相談員の福祉用具導入

事例——の5つで、パーセル・インデックス（BD）などさまざまなスケールを用いて根拠の見える化を目指した事例、AIやICTを活用して安全な利用やサービスの質向上を図った事例など、関心を惹く発表演題が並ぶ。大会開催を記念し、発表者の中からエイジライフの畠山浩さん、ポート・リハビリサービスの東條仁さんに、演題の概要や発表にかける意気込みを聞いた。

## 発表者

ポート・リハビリサービス 東條 仁さん



### 根拠をもったメンテナ ンスで事故を防ぐ

神戸市のポート・リハビリサービスで、福祉用具サービスに携わり15年目の東條さん。社内唯一のモニタリング専任スタッフとして日々利用者宅を回り、使用中の用具の安全確保に努めている。研究大会では、事故を未然に防ぐためのメンテナンスの心掛けについて、日頃の取り組みをもとに発表する。「モニタリングでは、福祉用具が正常な状態をキープできているか、各部をくまなく確認します。また、用具の活用により、ケアプランに位置づけられている生活目標が達成できているか、利用者に新たな生活課題やニーズが生じていないか、住環境や生活状況、体調面の変化などにも気を配ります」と東條さん

利用者の状態確認だけでなく、利用者の生活全般にまで視点を拡げて対応にあたっている。歩行器のキャスターの減り具合から、車輪をロックしたまま走行しているのではないかと、車いすのタイヤの摩耗が右側に偏っていたのが、ある時から左側に目立つようになったことから、身体のバランスや上肢の状態に何か変化があったのではないかと、使用状況の細かい変化も見逃さない。

大事にしているのは、使われている用具の構造や機能、特徴を正確に把握しておくこと。普段からカタログや説明書を読み込んで頭に叩き込み、安全上の正しい使い方もおぼろぎと覚えておき、利用者からのどんな問合せにもきちんと対応できるようにしている。

東條さんは、使用により摩耗消耗した福祉用具に対する着眼点を、しっかりと持って臨むことが重要という。「調整や部品交換などの判断は、これまでの経験や社内で蓄積されたノウハウを根拠をもって行います。例えばある時、ご利用者から歩行器のブレーキの効きが悪いと言われ、キャスター回りをよく見ると、ゴム製のブレーキシューが完全に取れてなくなっていたことがありました。坂の多い地域にお住まいだったので、ブレーキを用いることでゴムに亀裂が入り、しまりに断裂して丸ごと外れたのではと想像しました。もし、よく見るとブレーキの調整だけで済ませてしまえば、大きな事故にまでなりかねません」と東條さん。

「製品評価技術基盤機構（NITE）が公表する事故情報では、メンテナンス不足・不適切なメンテナンスが要因のケースもあり、それを参考資料として活用しています」と話す。メンテナンスの事例は社内でも共有し、今後同社は独自のメンテナンス基準の策定も目指している。

福祉用具のメンテナンスに関する工程管理のJISも認証が始まった中で、万全なメンテナンスを通じた安全確保が、レンタルの重要な価値であることを発信していきたいと、東條さんは意気込んでいた。

## 発表者

エイジライフ 畠山 浩さん



### 「意欲を引き出す技術 が我々の専門性」

#### 意欲の重要性を B-Iの変化からみる

埼玉県田市のエイジライフ「パナソニックエイジフリー」ショップ城北の畠山浩さんは、発表者としては今年が初の参加となる。同社・北嶋博也さんとの共同発表で、利用者の意欲とB-I（パーセル・インデックス）の変化の関わりをどうの事例で見比し、利用者の意欲を引き出すコミュニケーションや目標設定の大切さを語り、発信する。

2009年入社した畠山さん。「利用者の意欲とその後の心身状況の変化には強い結びつきがあることを、肌感覚としてこれまでも持っていました」と話す。その現場の感覚を、少しでも数値として表現できたいというのが、今回の発表テーマの主旨

旅行を中長期的な目標として設定したAさん。当初、移動は車いす利用だったが、歩行訓練を行うために歩行器も利用する動機付けにもなった。Aさんの頑張りが見え、5年をかけたB-Iは95点にまで上昇。特に歩行は5点（歩行不能。車いすで45m以上の操作可能）から15点（車いすや歩行器を使わず45m以上の歩行可能）と大きく改善した。

一方、転倒リスクを抱え、と

だ。対照的な事例についてB-I値の変化を比較した。

急性骨髄性白血病の利用者Aさんは、サービス利用開始時点でB-Iが50点だった。担当の福祉用具専門相談員が、Aさん宅でアセスメントを行っているところ、旅行先での写真が飾っているのを発見。「旅行がお好きなのですか」と切り出し会話が続き、ふいに「まだ旅行に行きたい」という言葉がAさんの口から溢れた。畠山さんは、意欲を引き出すための手段として「傾聴はとても大切」と指摘する。

「好事例」ではないBさんのケースを取り上げたのも、「安全利用はもちろん大切だが、その達成がモニタリングで確認できたのならば、より前向きな次の目標へ繋ぎ受援をしなければならぬ」という自身の気持ちも全国の福祉用具専門相談員と共有したいという気持ちからだ。畠山さんはこの発表が、同じ現場に立つ誰かの役に立てばとても嬉しいです」と発表への意気込みを語った。